

SCENE 36

彼女たちの 钣金塗装

糸村自動車

(沖縄県うるま市)

生田 愛音さん

保育士から钣金塗装業界へ転身

コンプレッサーの音が小気味良く響く工場。塗装ブースの中でマツダ46Vのテストピースをにらみつけているのが生田愛音さんである。

子ども好きだったことから短大卒業後は保育士として小さな子どもたちと日々を過ごしていた。だが、父親の影響で幼いころから車に親しんできたこともあり、心の奥にはいつも車の存在があった。それはいつの日か「車業界で仕事がしてみたい」という強い願望に変わった。中古車販売会社の営業職に転職し、車に触れるうち、「この色、自分で塗れたら面白いのでは？」と思い、2024年1月に钣金塗装の世界へ足を踏み入れた。

46V、女だから…… 様々な壁に立ち向かう

最初に勤めた工場で師匠と呼べる人に出会えた生田さんは、そこで一から塗装を学び始める。だが、半年ほどし



生田さんが独学で集めた46Vの資料とテストピース



いつの日か、
技術力で
ケンカをしたい！

て師匠の異動が決まると状況は大きく変化。「新しい上司は自分の作業が最優先で、教える気がなかった」。ようやく自分の好きな仕事に就いたのにこのままでは技術の向上は望めないと思った生田さんは、友人の紹介で現在勤める糸村自動車へ転職する。

今では塗装を中心に、軽钣金から仕上げまで幅広い業務を任されている。そんな生田さんが「塗装を始めて最初の大きな壁」と話すのがマツダ46Vだった。師匠に気軽に聞けなくなった中、手助けしてくれたのはSNSだった。「SNSでつながっている钣金塗装業の人たちの動画を参考にし、時には直接聞いたりもした。SNSで協力してくれた人たちが第二の師匠だった」と感謝の言葉を述べる。さらに独学で46Vを塗装する時のデータや状況を

メモし、テストピースを作るなど、その技術への熱意はスタッフ全員を驚かせるものであった。

「女だからできないだろ」。身内や周囲の人から言われた言葉を生田さんは忘れられないようだ。「そういう思いを持っている人を見返したい」と話す生田さんを会社側も職場環境の整備などでしっかりと支える。「女性でもできることをもっと教えたい。いつの日か、技術力でケンカをしたい。そして、教えてくれた人たち、応援してくれている人たちに良い背中を見せていきたい」と笑顔で話す生田さん。

目標である愛車のユーノス・ロードスターの全塗装、そしてグラインダータトゥー、エンブレイビングなどの様々なカスタムペイントにチャレンジするため、日々技術力に磨きをかける。



愛車のユーノス・ロードスター。10万km超えもまだまだ現役



一斗缶でのグラインダータトゥーの練習は欠かさない